

# 月刊自動車管理

1

JANUARY 2019

今月のテーマ

## 再確認! 交通ルール基本の「キ」



## 間口ランドサービス株式会社

●大阪市港区

「心・技・体」を磨いて乗務員を育成し  
安全運転・事故防止を実現

●概要  
所在地：大阪市港区海岸通1丁目5-29  
従業員数：152名  
車両台数：103台



取締役社長執行役員  
吉川 幸生 氏



第一事業部  
部長  
伊部 雅彦 氏



第一事業部  
南港営業所  
所長  
西 和幸 氏

トラックに大きく描かれたカエルのイラストが印象的な間口ランドサービス株式会社は、近畿を中心にスーパーなどへ食品輸送を行っています。ほかにも、冷蔵・冷凍輸送や学校給食配送、納品代行輸送等、お客様のニーズに合わせたサービスを提供しています。

## 安全に商品を運ぶために

会社では、カゴ台車を使って商品をユニット化することで手積みをなくし、効率よく安全に商品を配送する方式（ユニットロード配送）を採用しています（写真1）。荷積による乗務員の負担を軽減でき、カゴ台車ごと商品を運べるため、破損等の事故防止にも繋がっています。

一方、カゴ台車が転倒したときの安全性についても考えておかなければなりません。カゴ台車をテールゲートリフター（荷物積み降ろし用の昇降装置）に載せ

るときは、1台ずつ載せるように指導しています。なぜなら、過去にカゴ台車が転倒し、商品を破損させる事故があったためです。

会社が行った実験では、テールゲートリフターにカゴ台車を2台載せて荷降ろししたときと、1台載せて荷降ろししたときの作業時間は、5分ほどしか変わらないことが判明しました。そこで、多少時間がかかっても安全を優先し、カゴ台車を1台ずつ載せることをルール化したのです。

また、配送中は乗務員の様子を見ることができません。そのため、毎朝行う点呼では管理者が乗務員と積極的にコミュニケーションをとり、体調に問題はないか、困っていることや心配事がないかなどを確認するよう心がけています。

会社では管理者が乗務員と対面し、座った状態で点呼を行います（写真2）。



▲(写真2) 対面点呼を行う管理者と乗務員



▲(写真3) 大阪香里自動車教習所 安全運転管理支援チームによる原点復帰講習。乗務員の表情は真剣そのものだ



▲(写真1) ユニット化された荷物を荷積みする乗務員

約3年前、同社の交通事故防止の課題は「バック事故」でした。バック事故と起こる事故であり、相手があつて発生するものではありません。当時、管理者であった西氏はバックカメラを搭載することが事故対策になると考え、全車にバックカメラを搭載しました。

ところが、その期待とは裏腹にバック事故は減少しませんでした。バックカメラを過信するあまり、安全確認が疎かになってしまっていたのです。この結果に悩んだ西氏はインターネットで調べ、「大阪香里自動車教習所」に辿り着きました。そこには、安全運転管理支援チームという管理者を支援するサービスがあり、安全運転について勉強する機会を得ました(写真3)。

同社の乗務員に大阪香里自動車教習所の「原点復帰講習」を受講させたところ、普段運転する車両の長さ、幅、高さを正確に即答できる人はほとんど存在しませ

んでした。

また、構内を使った実地訓練では、多くの乗務員が自らの車両感覚の曖昧さを実感し、安全確認の重要性を再認識することができ、安全運転に対する意識が変わりました(写真4)。

このほか、同社の社有車は、バックカメラ以外にも最新の機器を搭載していますが、そうした補助機器に頼り切った安全確認では、危険を見落とすことが理解できました。その結果、今年バック事故は1件も発生していません。

**評価制度で意欲を高め、安全運転意識の変革を促す**

毎月、乗務員には安全運転について自己評価をしてもらい、上司と面談する機会を設けています。評価表は、もともと乗務員と配車係のツールとしていた書類をベースにして作成しました。

評価項目には、

- ・ 運転マナーはよかったか
- ・ 勤怠(遅刻や欠勤がなかったか)
- ・ 整理整頓はできていたか
- ・ 運行上のルール(輪留めはできていたか 等)
- ・ デジタルタコグラフの評価

(A・B・Cランクの3段階評価)

・ 誤配送はなかったか

・ 優良運転者であるかなどがあります。

自己評価をしてもらうことには意味が

## 乗務員教育と事故の関係性

時間はかかりますが、乗務員の様子をじっくりと観察し、変化を見落とさないことは健康起因事故の防止に繋がるため、必要な時間と考えています。

こうした取組みを通して、乗務員に無理をさせないように配慮するとともに、日々、商品を安全に配送できるよう改善を重ねています。

んでした。

## 評価制度で意欲を高め、安全運転意識の変革を促す

また、構内を使った実地訓練では、多くの乗務員が自らの車両感覚の曖昧さを実感し、安全確認の重要性を再認識することができ、安全運転に対する意識が変わりました(写真4)。

このほか、同社の社有車は、バックカメラ以外にも最新の機器を搭載していますが、そうした補助機器に頼り切った安全確認では、危険を見落とすことが理解できました。その結果、今年バック事故は1件も発生していません。

# 現場から



▲(写真6) 交通安全講習会では大阪府下の交通事故の現状や対策について学ぶ



▲(写真7) 「トミカ博」に4t車を展示。トラックパワーゲート昇降と冷え冷え体験を行った



▲(写真4) 実地訓練のようす。車両感覚のズレをなくすために目標物を設置して正確な距離間を掴む



▲(写真5) 協力会社との合同安全会議も実施されている

あり、他人からあれこれ指摘されるより、本人が意識を持って改善に取り組むことで、達成感を得ることができるといえます。安全会議(写真5)などでも同じことが当てはまりますが、管理者から対策を指示するよりも、小集団を作って乗務員たちに考えさせることのほうが目標がより明確になり、意識づけになります。

たとえば、信号待ちで停止する際に前車との車間距離を3mあけよう、と指示するのではなく、どれくらいあければ威圧感がないか、といった検証を含めて乗務員たちに考えさせ、ルール化させることが重要です。

この評価制度以外にも、無事故・無違反表彰を受けた乗務員には手当を付与したり、外部のセミナー等への参加や大型免許取得制度を利用してスキルアップを目指す従業員を全力で支援しています。

## 安全運転意識の向上と無事故・無違反への挑戦

毎年、大阪府港警察署より講師を招いて「交通安全講習会」を実施しています(写真6)。講習会には社員約150名が参加し、大阪府下の交通事故発生状況や交通安全ビデオを視聴しています。こうした講習で管理者と乗務員の意識を変えるときともに、安全運転への意識をいっそう高めました。

また、大阪府では大阪府無事故・無違反チャレンジコンテスト(以下、チャレ

コン)という安全運転活動が行われており、同社では各事業所毎に従業員を数グループに分けて毎年、継続して参加しています。

このような取り組みを続けることで、従業員の安全運転意識が高まり、交通事故防止に繋がっています。

## 終わりにき改善

ほかにも、地域への貢献活動として「トミカ博」に働く車として出展し(写真7)、スーパーやコンビニへ要冷蔵の食品を運ぶ4tの要冷車とラウンダーカーを出展。実際に乗ったり、触ったりしてもらうことで、商品が安全に配送されているのを感じてもらっています。

また、環境面に配慮したハイブリッド車や、天然ガス車(CNG車、LPG車)の導入及び、Gマーク(安全性優良事業所)の継続認定を受けられるよう、法令順守や運行管理、労務管理、帳票類の整備等を日々、厳しくチェックしています。

同社では、生産性を高めることだけでなく、安全性が確保されているか独自で構築した配送管理システムを導入し、リアルタイムで状況分析を行うなど、配送品質の更なる向上に力を入れています。

乗務員に大切なのは精神の穏やかさや心配り(心)、運転技術(技)、健康な身体(体)であり、「心・技・体」を磨くことが必要だと指導しています。